

## ■研究調査レビュー

## 軍政下奄美における人類学調査

桑原 季雄（鹿児島大学法文学部）

はじめに

1951年9月、戦後間もない軍政下の奄美で、恐らく文化人類学者による初めての人類学的調査が一人のアメリカ人によって行われた。ニューヨークのシラキウス大学の文化人類学教授ダグラス・G・ハーリングである。当時の奄美は、サンフランシスコ対日講和条約の発効によって、奄美の日本復帰運動も一段と激しさを増していった頃であった。ハーリングは、ワシントンの米国連邦学術研究委員会の太平洋科学研究部による沖縄・宮古・八重山・奄美四群島の学術調査が1951年から1952年にかけて行われた際、奄美に派遣され、1952年3月までの半年間にわたって人類学的調査を行った。この調査はアメリカ軍政府行政官への報告を目的としたものであったが、ハーリング自身にとっては奄美の人類学的研究の予備調査的な性格のものであった。ハーリングは奄美大島に来島する前に東京で民俗学者柳田国男氏と会い、氏の紹介で、奄美博物館（群島政府立）の民俗学研究員の山下文武氏を訪ね、同じ博物館主事で郷土史家の文英吉氏などの協力も得て調査を行った。

ハーリングは奄美大島での6ヶ月間の調査の後、1952年3月に島を離れ、一時東京に滞在して資料の整理をした後アメリカ本国へ帰国した。そして1952年10月、ニューヨーク州シラキウス大学からGHQを始め国連、米国陸軍省、国務省、琉球民政府等に「琉球諸島における科学的調査：琉球諸島北部奄美大島」という報告書を提出し、その中で、軍事的事情が許すならば速やかに奄美を日本に返還すべきであることを提言している。

1961年6月、ハーリングはシラキウス大学を定年退職し、その後も名誉教授として後継の指導にあたりとともに、1964年、同大学内に「琉球研究文庫」(RYUKYU RESEARCH COLLECTION)を創設し、広く琉球関係の文献資料の蒐集をはじめた。その目的は遠くハワイまで行かなくともアメリカ本土で米国における琉球研究ができるよう、琉球研究センターの設立を意図したものであった。しかし、ハーリングは定年から4年後の1965年8月に病没した。

本稿の元になったハーリングの調査報告書のコピーは奄美博物館に所蔵されていた。筆者は2003年2月に奄美博物館でA4用紙にタイプされた86ページに及ぶ報告書の綴りのコピーを入手し、当時ハーリングの助手をされ、親交の厚かった山下文武氏からも話を聞くことができた。本土復帰後の奄美は日本の人類学者の注目の的となり、多くの人類学者が調査研究に来島した。その先鞭をつけたのは1955年から3年間にわたって行われた九学会連合による学術調査で、人類学者を含む多様な分野の研究者が現地調査を行い、総合報告書『奄美-自然と文化』（1959）が刊行された。また1975年には第二次九学会連合による奄美研究が実施され、1982年に総合報告書『奄美-自然・社会・文化』が刊行されている。その間、関東の人類学者による奄美の親族調査や宗教儀礼に関する調査などが精力的に行われた。しかし、ハーリングの報告書の存在については山下文武氏の懐古的な記述（山下1994）や山下欣一氏による短い紹介（山下1981）のほかは、人類学者の奄美研究において言及されることはほとんどなかった。また、1951年から1952年にか

て行われたワシントンの米国連邦学術研究委員会の太平洋科学研究部による沖縄・宮古・八重山・奄美四群島に関する学術調査についても短い言及はあるが(渡邊 1986)、その全貌はほとんど明らかにされていない。さらに、奄美の調査研究を担当したハーリングがどのような人類学的研究で知られ、また日本に関する人類学的研究においてはどのような足跡を残したのかといったことについても、何冊かの著書(Harling 1929, 1943, 1946, 1949, 1961, 1969)が知られるだけで、不明な点が多い。ただ、ハーリングは大正大震災の1917年から1922年まで東京に在住していた事があり、罹災者の救済事業に手をさしのべるなど、日本との係わりが深かったことがうかがえる。

本稿では以上のような資料的制約と筆者の準備不足を考慮して、米国太平洋科学研究部の沖縄・宮古・八重山・奄美四群島に関する学術研究および戦後の日本の南西諸島研究におけるハーリングの報告書の性格や位置づけについての考察は行わず、むしろ報告書の内容から一人のアメリカ人の人類学者の目に映った軍政下奄美の姿を紹介し、あわせて筆者の人類学的な立場から若干のコメントを加えるにとどめたい。

#### 奄美大島での現地調査

ハーリングは1951年9月に、東京から沖縄を経由して奄美大島に来島したが、到着後はただちに軍政府内に一室を設けて調査に着手した。調査は名瀬市を拠点に、主に比較的交通の便のいい名瀬市の近辺と奄美本島北部の龍郷村と笠利村で行われた。瀬戸内町、住用村、宇検村、大和村など大島本島の南部については、道路事情があまりよくないということと、奄美大島南部をカバーするだけの体力的自信がなかったという健康上の理由でほとんど調査は行われていない。ハーリングは、毎日のように通訳と助手を伴いジープで名瀬市内を始め近隣の小湊、朝仁、小宿、大熊、浦上、根瀬部、知名瀬、そして龍郷村や笠利村をまわり、夕食の団欒から宴会、集会、コンサー

ト、八月踊り、祭り、宗教儀礼、葬式に至るまで生活の様々な場面で多くの参与観察調査をおこなう一方、奄美群島府政府の種々の統計資料によって奄美群島の実態把握にも力を注いだ。また、名瀬市内の女子高校生に依頼して奄美の老人のライフヒストリーを蒐集したり、同じく市内の11人の男子高校生に頼んで2ヶ月間日記をつけてもらったり、さらには婦人会を通して奄美群島全域で家族に関するアンケート調査を行っている。また名瀬市の家政科の女教師に依頼して子供を持つ母親や20人の産婆に対して出産や育児に関するインタビューを行っている。さらに島唄の唄者や踊り手、ノロやユタなどの宗教的職能者に対しても調査を試みている。助手として常に調査に同行した山下文武氏によれば、ハーリングは奄美の日本復帰運動郡民大会の夜に提灯行列の写真を撮影しに出かけたり、復帰運動についても地元の人々と率直に語り合ったという。また、写真や映像記録もたいへん重視し、特に大島紬や黒糖、鯉節の製造過程や、板付舟等の造船過程については何度も現場へ通って撮影記録をとっている。また録音機を使って島の民謡も数多く録音し、特に沖永良部民謡の実演をきいたときにはヨーロッパ中世の民謡をきいているようだと讃嘆したという(山下1994)。しかし、このように収集された数多くの貴重な資料が、アメリカへ移送の際に行方不明になって紛失するというアクシデントに見舞われたことは、その後の奄美研究にとってはたいへん残念なことである。

ハーリングの調査はアメリカ軍政府の行政官への報告が課せられた調査であったが、人類学的観点からの調査目的は、文化の比較研究に必要な、異文化としての奄美文化の正確な記録をえることであった。また、奄美研究における重要なテーマの発見もその調査の目的だったという。従って、奄美の人々の些細な風俗習慣であっても価値があるとして、奄美の人々の育児方法等々についてごくありふれた質問をするかも知れない旨をあらかじめことわっている。さら

に、奄美の人たちのありのままの姿や日常生活、日常のしぐさを可能な限り写真で記録したいと、写真や映像の重要性を強調した。このようなハーリングの調査態度には、国民の性格の重要な相違は育児上の些細な事柄に関連しているとして当時アメリカで大きな影響力を持っていた「文化とパーソナリティ」学派の強い影響を見てとれる。

#### 軍政下の奄美

上述のように、軍政下奄美での調査研究の目的は奄美の人々の生活観や生活様式についての記述で、報告書の内容は、地誌、人口、歴史的背景、言語、社会生活（学校、団体組織、家族、娯楽、手工芸、生活水準、社会階層、犯罪）、日本本土や沖縄との文化的差異と類似性、復帰運動と共産主義運動との関連、人々の恐怖の対象などについて書かれ、そして最後に提言として、合衆国の政策、奄美群島の民政と日本本土復帰について述べている。

1951年当時の奄美群島は、人口が約22万人で、その内訳は、奄美大島が11万人と全人口の約半分を占め、喜界島18,000人、徳之島54,000人、沖永良部島27,000人、与論島8,500人となっている。また世帯人口でみれば1世帯平均4～5人で、男女比は女100人に対して男88人という数字が示されている。男性の人口が少ないのは戦争によるものと沖縄への出稼ぎのためである。奄美の女性もかなり沖縄へ行っているが、60家族のアンケート調査では1家族として沖縄人と婚姻関係にある家族はいなかったという。また報告書では概して沖縄人が、ハワイやブラジル、フィリピンなどこの国へでも移住したがるのに対して、奄美からの移民はほぼ日本本土への小さな移住に限られるとしている点や、日本軍は沖縄人を徴兵して朝鮮や満州へ労働部隊として送り込んだが、奄美の人はそうでもないなどとして沖縄人との違いが強調されている。

報告書によれば、当時、奄美大島の全人口の81%は農民であった。また島の全面積のおよそ3～5%が耕地で大半は山林で

ある。1950年当時の奄美大島の土地利用統計によれば、水田はわずか1.7%で、山林が61.3%、畑が4%、その他が25.8%となっている。サツマイモやソテツ、サトウキビ、米といった主要作物の他にツバサやツワブキ、タピオカ、ゴボウなどが作られている。薪も重要な収穫物に分類されている。当時琉球諸島で水力発電を有するのは奄美大島と徳之島のみであったことや、また当時すでに山林の過剰伐採が土砂崩れの原因として大きな問題となっていることなどが記されている。その他、どの集落でも一戸に1～2頭の豚を飼っていて、名瀬市などでも豚を飼っている家が少なからずあったという。

ハーリングは1951年に東京から飛行機で沖縄へ飛び、初めて沖縄を見たときの強い印象を、「日本から外国へ来たかのようにだった」と言って、沖縄と日本とのあまりの違いの大きさに戸惑いを覚えたことを記している。また、その1週間後に沖縄から奄美の名瀬市に船で到着したときの第一の印象は、「また日本に戻ってきた」であった。奄美群島は文化的には沖縄や宮古・八重山よりも明らかに日本的であり、奄美の人は完全に日本人である一方、奄美と日本本土の間の文化的違いも多くあり、その理由として、ハーリングは奄美が250年以上に及ぶ薩摩の支配下にあって、徳川時代の文化的影響から隔離されていたからであるとする。その反面、奄美は薩摩の侵略によって1600年初頭以来日本の統治下にあり、日本に統合されてきたともみている。こうして奄美群島は地理的には琉球諸島の一部であるが、文化的には日本本土に属するとして、奄美のと沖縄の差異及び奄美と日本との近似性を強調するのであった。

言語に関しては、ほぼ全ての人が奄美の16の方言のうちの一つ以上について知っているという。方言は構造的には日本語と一致し、その語彙は日本の古語を多く含み、さらに音声学的には日本語よりも豊かであるという言語学的理解も示されている。このように奄美の方言は古代日本語と密接に

結びついていることと、そのため、標準日本語よりも「より純粋」であることが言語学者によって明らかにされて以来、奄美の人の方言に対する誇りが強くなったという。

このように報告書では、奄美と日本本土との「近さ」が強調される一方、例えば、ほぼ全ての奄美人が日本に親戚・家族がいるが、沖縄人との間に通婚はまったく見られなどといった例をあげながら、沖縄との「距離」もまた強調されている。また、ハーリングは、明治以来の日本政府は奄美の人を農奴の身分から解放し、新しい技術や教育などを導入してきたため、奄美にとって日本政府は自由と進歩の象徴であり、故に、復帰運動は当然の帰結であると主張するのであった。

#### 奄美の生活誌

人口約32,000人の名瀬市には、各種の団体があり、その数は、奄美大島婦人会（会員2万人）や名瀬市婦人会、奄美大島青年団（会員3万人）、名瀬市青年団などの一般団体が7つ、農協などの農業系団体が2つ、生け花や短歌等の芸術系団体が4つ、信用組合などの金融系団体が5つ、奄美育英会や名瀬市PTA、大島農業高校同窓会等の教育系団体が14、天城、与論、住用等の郷友会が7つ、労働組合系団体が6つ、地元商業団体が4つ、産婆や助産婦、鍼灸、医師、歯科医等の専門職団体が8つ、宗教団体が7つ、大島紬や美容室、畳や木炭生産等の商工系団体が18あることなどが詳細に記されている。

家族や親族について、奄美の人は家族規範が日本のそれと完全に一致していると主張するが、ハーリングによれば、理論的には日本におけると同様に男性の系統を排他的に強調する父系的家族組織であるが、実際には女性の影響力が大きいという。また、日本本土では10世紀の中国伝来の仏教の影響によって女性が従属的地位におかれてきたが、奄美群島では仏教は受容されてこなかったため、奄美の女性は本土に比べて自由であり、また、親族関係ばかりでなく

姻族関係も非常に緊密であるという。さらに、家族内の情愛が強く、妻子や兄弟姉妹に対して誇りを有し、アメリカ人から見ても愛情表現はけっして控え目ではなく、むしろ大変好意のもてるものであることなどが記されている。

当時、賃金は日当80円～100円（75セント以上）で、店員や事務員の月給は2,500円以上（20ドル以上）であった。教員の給与は「飢餓給与」と言われ、初任給は2,000円（16.6ドル）で、校長の月給は3,300円（26.5ドル）である。教員は満足に服や本も買えず、医療費や歯の治療費にも事欠くほどだという。名瀬市の5人家族で月に最低でも家賃込みで5,000円は必要であり、7,500円でもそこそこの生活しかできないため、女性は家で機織りなどをして家計を助けるのが普通であった。名瀬市内の5つの家族の家計調査から、1952年2月の市民の平均的な家計は、新聞代が45円、学費が80～200円、主食費が1,000～1,600円、洋服代が300～1,000円、銭湯代が200円、散髪代が60～100円、家賃が75～180円などとなっており、1ヶ月の支出の合計は4,455円～7,595円であった。

当時の奄美の主食はサツマイモで、ハーリングが農家に話を聞きに立ち寄ると、ふかしたサツマイモがよく出たという。またソテツは緊急避難食であるが、極貧者にとっては常食であったらしい。報告書には「ソテツ地獄」という言葉もみられ、奄美の人々は「総じてひどく貧しい」と結んでいる。

ハーリングは大島紬を世界で最も手の込んだ手工芸品の一つと見てその工程を詳細に記述している。本土のデパートで売られる大島紬の値段は最低でも60ドル（7,500円）以上し、かなりの贅沢品であった。サトウキビから作る黒糖も同様に主要輸出品目で、黒糖飴は農民の大好物であった。竹編みのかごも盛んに作られているが、あまり利潤はないという。

奄美と本土の文化的差異

奄美と本土の文化的差異は概ね小さいが、指摘にあたるとしていくつか挙げられている。まず、本土に比べて豚の役割が大きいことや、家の床が、畳の部分が少なく板間であること、赤子を背中に背負うのではなく腕に抱えること、ソテツの使用、家の形状、特に高倉が古代日本に類似していること、さらに、荷物を運搬するとき背負いかごの帯を額にあてる運び方などが奄美独特であるとされている。

奄美では本土に比べて礼儀や「面子」があまり強調されず楽天的で、個人的関係も直接的で打ち解けたものであり、互いによく冗談を言い合うという。また、奄美の家族は個人にとって「安堵の源」であり、本土のように、常に家族の体面を汚すのではないかという「脅威の源」ではないこと、故に、奄美の人はあまり家の体面にこだわらず、貧困や恵まれない環境にもかかわらず本土の人よりも人生を楽しんでいるという。そして島唄や島の踊りは、そうした屈託のない態度の見事な表現だという。

ハーリングによれば、本土の人は友人を家に招くことがほとんどなかった。ましてや外人はである。仮に招かれることがあっても、家族への愛情や誇りを見せまいとし、粗末な家や愚妻、無知な子供のことを詫びてばかりいるが、奄美の人は家や食事に気軽に招き入れ、平気で両親や子供、妻への愛情を表現する。ある人は、ハーリングを母親のところに案内し、母親の肩に手を回して、島で一番の母親であると言って自慢げに紹介したという。またあるとき、誰かを訪ねて名瀬市長と同行した際、ジープで市長の家まで迎えに行ったら、雨の中、カッパをつけて家から出てきた市長が、突然、妻を紹介すると言って家に引き返し、わざわざつれてきて丁寧に紹介してくれたエピソードを引きながら、日本本土では、奄美でみたような家族内の屈託のない愛情表現を一度も見たことがなかったと述べている。

奄美の育児については、育児書が日本本土ばかりでなく奄美の育児慣行にも変化を

もたらしつつあるという。母乳は一般的であるが、だんだん粉ミルクを与えることも多くなってきていることや、トイレの騷みについても、あまり感情的にならずに行われていることが記されている。さらに、ハーリングは、2、3歳の子供たちがよく通りに立って大声で泣きわめいているのに誰も気をとめないというありふれた光景に注目し、その理由として、ふだん面倒を見てくれている年上の子供たちが学校へ行ったり同じ歳の子供たちと遊んでいると、小さな子供たちは取り残されたという単なる寂しさから立ったまま泣いているのだという。

奄美の人は本土の人よりも率直でざっくばらんであるが、話題によっては、相手が信頼できる人物であるとわかるまで最初は何も教えてくれなかったこともあったという。例えば、ノロ祭祀については、誰も何ヶ月間も何も教えてくれず、奄美滞在があと数日という時になってようやく情報が得られたという。

日本政府の神道儀礼については、戦時中に国家によって強要されすぎたせいで、奄美の人々は自分たちの民間宗教にこそ神道の真の形が含まれていると感じていることもあって、当時、神道に対して腹立たしく思っている人が少なくなかったという。名瀬市の西仲勝集落での聞き取り調査によれば、西仲勝では戦前に神社を強制的に作られ、国家神道を強要されたので、戦争が終わった今では、国家神道にはうんざりというのが人々の素直な感情だったという。国家神道は日本の倫理道德の基盤であったが、倫理道德は奄美の村々によって大きな差があり、道路や土手の清掃に責任を持つ村もあれば、そうでない村もあるとして、例えば、ハーリングは台風後の復旧作業に集落の人総出で精を出している浦上集落の人々の自立自尊、結束、連帯性等について生き生きと描いている。

宗教は全体として退潮で、調査でも宗教的無関心と無神論者が広くみられる一方、天理教と生長の家が信者を拡大しつつあった。天理教は、当時、奄美大島だけでも

2,000人の信者がいるといわれ、その半数は名瀬市にいたり、市内に13の教会があり、市外にも教会が100ほどあること、月に一度約500人の信者が全島から名瀬市に集まってくるなどが記されている。他方、生長の家については、奄美群島には720人の信者がいるとされ（名瀬市に150人、徳之島に70人、その他に500人）、名瀬市の知識人の間にも浸透していた。天理教も生長の家も信仰療法によって信者拡大をはかっていた。また、仏教は奄美群島にしっかりと根を下ろすことはなかったが、観音信仰と神道の習合現象がみられることなども指摘されている。

琉球諸島で公然と行われていた土着のノロ祭祀は、奄美では明治以降、警察との長期に渡る激しい確執のため抑圧されてきたことなど、ハーリングは消滅に瀕している奄美のノロ祭祀について5ページ（pp.63-67）におよぶ詳細な記述を行っている。そして奄美の人々の無神論の告白は、密かに営まれてきたノロ信仰のためのカムフラージュではないかと主張する。また、シャーマンは方言で「ホゾン」と呼ばれ、今日言うところの「ユタ」と同義であると思われるが、報告書には「ユタ」という表現はほとんどみられない。

ハーリングによれば、密貿易は長い間奄美・沖縄では普通の職業であり、軍政下における奄美と本土間の貿易規制が密貿易をいっそう活性化しているという。また、1952年2月には、本土の学校にいて多数の奄美の少年たちが休暇を利用して「密航船」で帰省してきており、ハーリングは彼らと会って話を聞いていることから、密貿易や密航および密航船はアメリカ軍政府にも既成の事実ではなかったかと思われる。

#### 復帰運動と共産主義

ハーリングが人々の恐怖の対象と見なしているのは共産主義思想である。奄美の人は共産主義者によって歪曲された「状況」という言葉や「国連信託統治」、「国際連盟」、

「命令（指令）」、「植民地」といった言葉に戸惑い恐怖を抱いているという。奄美の共産主義者の多くは満州帰りの労働者であり、彼らは満州で共産党によって教育された。満州の労働部隊で思想教育をたたき込まれて奄美に戻ってきた共産主義者は、その後、多くの集落で指導者的な立場にたち、青年団に潜入したりして復帰運動のリーダーシップを牛耳っているという。彼らの戦略は、共産主義のエネルギーを復帰運動に向けることであった。こうして共産主義者は奄美の人の日本復帰の願いを搾取することによって愛国者のふりをしているという。さらに、本土ほど明瞭な社会階層が存在しない奄美で、共産主義者は階級対立を搾取できないので、低賃金の教員に働きかけているという。ハーリングは、共産主義者が恐怖を利用して宣伝活動を行っているのであるからこそ、恐怖という問題が理解され、取り扱われるべきだという。また、共産主義者につけ入る隙を与えないよう階級分化の増大を防止するためにあらゆる可能な努力がなされるべきであると提言する。

#### むすび

軍政下奄美におけるハーリングの文化人類学的調査について以下のようなことが指摘できるであろう。

1) ハーリングの調査研究は、問題発見のための予備調査的、網羅的調査であった。ただ、奄美の家族や親族に関する記述で、理論的には父系的であるが、奄美の女性の比較的高い自由度や姻族関係が非常に緊密であるとする分析などは、その後の奄美の家族・親族研究の双系的親族組織論の方向性を先取りしたものと言えなくもない。

2) 軍政下の奄美の現状について、軍政府への実際的かつ利用に値する具体的情報提供が強く意識されている。特に、共産主義思想や共産主義者への言及が数多くみられる点や、貧困が共産主義者のつけ入る隙を与えているとみて様々な援助の必要性を指摘する点、復帰運動のリーダーも共産主義思想に強く影響されたと見ている点など

に、純粋な学術調査というよりも、軍政下という極めて高度な政治的状況下での人類学的研究の中立性や客観性の限界が見えかくれするような調査研究であるように思われる。

3) 報告書は、沖縄や日本本土との比較により、奄美が文化的に沖縄よりもむしろ本土に極めて近いことを強調して本土復帰運動に理解を示し、奄美の日本返還への明確な提言に結びつけている点で、ハーリングは、結果的には、沖縄占領をむしろ逆説的に正当化しているようにも思われる。

4) 奄美の歴史に関するハーリングの理解によれば、奄美文化の基礎は、西暦1185年の壇ノ浦の合戦という日本の内戦で敗退した平家の残党が大挙して移入したことによってつくられ、さらに薩摩藩による奄美の隸属化によって、奄美は日本本土における徳川250年の影響を受けずにすんだという。このように奄美は徳川の影響を受けなかった日本文化を代表するが故に、重要な研究領域であり、また、奄美文化は古典的であるが、完全に日本的であるとするハーリングの歴史的理解には多くの疑問と違和感が残る。

以上、軍政下の奄美という高度に政治的状況下でのハーリングの文化人類学的調査研究は、政治的偏向や対象社会の人々への同情に足もとをすくわれることなく可能な限り没価値的あるいは中立的であろうとして調査研究を行うことが容易でないことを教えてくれる。他方、奄美の現状を踏まえて、アメリカ人行政官の日本語や現地の歴史文化に対する教育の必要性を強調し、そのために合衆国の補助金をもっと教育へ向けるべきであるといった提言など、ハーリングの報告書には現地の文化に対する敬意や少数者や弱者に対する暖かい視線が感じられ、軍政下の奄美の社会状況が異文化の人類学者の目にどのように映ったかを具体的な事実でもって教えてくれる貴重な資料といえよう。

#### 参考文献

- Haring, Douglas G.  
 1929 *The Land Of Gods And Earthquakes: Adventures in Japan*, Columbia University Press, NY.  
 1943 *Blood on the Rising Sun*, Philadelphia Macrae Smith Company.  
 1952 *Scientific Investigations in the Ryukyu Islands: The Island of Amami Oshima in the Northern Ryukyus*, Pacific Science Board, National Research Council, Washington D. C.  
 1964 *Ryukyuan and Japanese Influences*, Allan H. Smith ed. *Ryukyuan Culture and Society: A Survey*, University of Hawaii Press.  
 1969 *Okinawan Customs: Yesterday and Today*, Charles E. Tuttle, Vermont & Tokyo.  
 Haring, Douglas G., ed.  
 1946 *Japan's Prospect*, Cambridge: Harvard University.  
 1949 *Personal Character and Cultural Milieu: A Collection of Readings*, Syracuse University Press.  
 山下欣一  
 1982 「奄美の民俗に関する既刊文献の状況」『南島史学』第19号  
 山下文武  
 1994 『奄美の歴史さまざま』(財)奄美文化財団  
 渡邊欣雄  
 1986 「南西諸島(社会構造)」, 日本民族学会編『日本の民族学 1964～1983』弘文堂